

崇城大学教授 星合隆成

前回、「地域を救う新たな価値観」のための3つの考え方として、「仮想化」「体系化」「可視化」を学ぶ必要がある」と書きました。今回は「体系化」「可視化」について触れます。

「体系化」とは、ピア（仮想化された地域資源）同士をどういったトポロジー（接続形態）でつなげるかということです。ピアとは前回、さまざま

に、ユーザーAは利用者であると同時に配信者の二つの役割を担うこととなります。この仕組みによる音楽ファイルの拡散、ダウンロード先の拡大により、音楽ファイル配信者への負荷集中を抑止するのです。

最近この仕組みを実際に体験したことがありますか？ そう、SNSのリツイートやシェアの機能です。たとえば、ツイッターでCさんがタイムラインにつぶやきま

す。Aさんはこれを見ることができるともリツイートします。すると、このつぶやきがAさんのタイムラインにも表示され、BさんはAさん、もしくはCさんのタイムラインでこのつぶやきを見ることが

できるのです。このようにCさんのおつぶやきは順次拡散されていきます。

ハイブリッドモデルを含め、つながり方、情報の拡散の仕方は7通りに分類されます。さまざまな地域資源同士をどのような形態でつなげ、つながった地域資源の情報をどのように拡散するか。「地域を救う新たな価値観」を考

えるうえで、このアプローチは極めて重要です。なお、残りの6通りのトポロジーについては、木葉舎より出版されている『つながりを科学する地域コミュニティブラン

ド」を参考にしてください。最後に、「可視化」について説明します。「SCB」(地域コミュニケーションプラットフォーム)では地域の活動を、①「すべての活動において共通的部分(地域活性化プラットフォーム)」と、②「活動固有の部分(地域活性化アプリケーション)」との2階層に分けます。そして、地域の力で地域活性化プラットフォームをあらかじめ構築しておくことによって、これまでの地域活動に比べて、低コスト・短期間で簡単に地域の活動を展開できるようにします。

また、類似の活動の重複を少なくし、活動同士の連携やノウハウの共有も容易になることで、新たな発火やシナジー効果を期待できます。さらに、プラットフォームという知見などのフィードバック先を提供することで、活動の品質を高めることが可能になります。

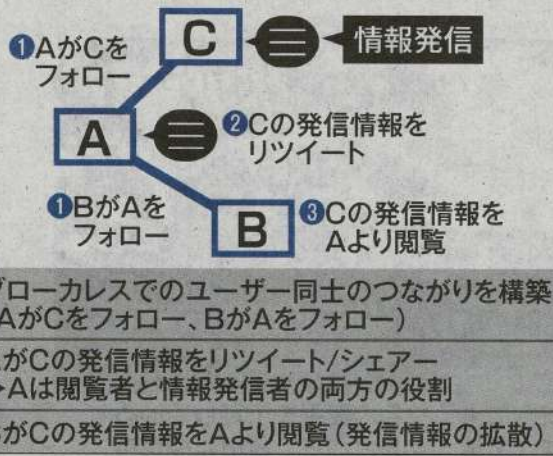
これは、それまでコンピューターシステムを個々にゼロから構築していたのに対して、コンピューターシステムを「システム共通の部分(OS・オペレーティングシステム)」と「システム固有の部分(アプリケーション)」に分離することによって、アプリケーションの開発(システム開発)が容易になったこと

からヒントを得たものです。しかしながら、この地域活性化プラットフォームの構築・運営が負担になっては本末転倒です。そこで、地域資源をP2P・ブローカレス(仲介者不在)で互いにつなげることによって地域活性化プラットフォームを構築するとともに、この地域資源のつながりを外部に公開して可視化することを、地域活性化プラットフォームへの地域資源の参加を促すのです。

すなわち、地域資源のつながりを可視化する方法として、地域活性化プラットフォームを構築・公開することで、SCBでは、このように地域資源のつながりを科学的に行うことにより、持続的、再現的、汎用的な地域資源のつながりを低コストで実現しているのです。

情報の拡散とプラットフォーム化を

SNSの仕組み(ハイブリッドモデル)



⑦ SCB理論①